

# 《アディーナ》 作品解説

水谷 彰良

2001年に当HPにアップした原稿（初出は『ロッシニアーナ』第19号、2001年発行）を増補改訂しました。

（2011年9月改訂）

## I-25 アディーナ *Adina* <sup>1</sup>

**劇区分** 1幕のファルサ (farsa in un atto [初版台本の記載は farça em 1 acto])

**台本** ゲラルド・ベヴィラクワ・アルドブランディーニ (Gherardo Bevilacqua Aldobrandini, 1791-1845) が下記の原作を改作。1幕 (全14景)、イタリア語

**原作** フェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865) の台本《カリフと女奴隷 (*Il califfo e la schiava*)》(フランチェスコ・パジーリの作曲で1819年8月21日にミラーノのスカラ座で初演される前に、アルドブランディーニが改作したと推測。解説参照)。

**作曲年** 1818年 (4月半ば～6月初めの間と推測)

**初演** 1826年6月12日 (月曜日)、リスボン、サン・カルロス劇場 (Theatro de São Carlos)

註：多くの文献が採用した6月22日が誤りであることは、全集版序文 p.XXXVII で明らかにされた。

**人物** ①カリフ Il Califo (バス、E b・g) ……バグダッドの僭主

註：従来の文献表記は Califfo であるが、全集版はロッシーニの表記 Califo を採用。なお、初版台本の人物表は O Califa。

②アディーナ Adina (ソプラノ、b b'・b") ……セリーモの恋人。最後にカリフの娘と判明する

③セリーモ Selimo (テノール、d'・d"") ……アディーナを愛するアラブ人の若者

④アリ Ali (テノール、c'・a") ……カリフの信任厚い部下

⑤ムスタファ Mustafà (バス、E b・g) ……後宮の庭師

他に、男声合唱とエキストラ (役の設定なし)

**初演者** ①ジョ ヴァンニ・オラーツィオ・カルタジェノヴァ (Giovanni Orazio [出版台本では João Oracio] Cartagenova, 1800-1841)

②ルイージャ・ヴァレージ (Luigia [初版台本は Luiza] Valesi, ?-?)

③ルイージ・ラヴァーリア (Luigi [初版台本は Luiz] Ravaglia, ?-?)

④ガスパーレ・マルティネッリ (Gaspere [初版台本は Gaspar] Martinelli, ?-?)

⑤フィリッポ・スパーダ (Filippo [初版台本は Filippo] Spada, 1789c-1838)

**管弦楽** : 2フルート/ピッコロ、2オーボエ、1イングリッシュ・ホルン、2クラリネット、2ファゴット、4ホルン、2トランペット、1トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、システル [シストリ。註]、弦楽合奏、レチタティーヴォ伴奏楽器

註：ロッシーニはシストリ (Sistri [鉄琴の一種]) をシステル (Sister) と表記することがある (例：《アルミーダ》)。

しかし《エルミオーネ》ではシストリをトリアングルと同義に用いており、《アディーナ》のそれがどちらを指すか不明。

**演奏時間** 約80分

**自筆楽譜** ロッシーニ財団、ペーザロ (第三者の作曲を含む。解説参照)

**初版楽譜** Tito di Gio. Ricordi, Milano, 1855-59. (ヴォーカルスコア初版)

**全集版** I / 25 (Fabrizio Della Seta 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 2000.)

**楽曲構成** (全集版に基づく)

N.1 導入曲〈晴れやかに光り輝き *Splende sereno e fulgido*〉(セリーモ、ムスタファ、カリフ、合唱)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈後宮へ行き *Andate, e del Serraglio*〉(アリ、カリフ)

註：全集版の楽曲構成の冒頭語に誤植がある。

N.2 アディーナのカヴァティーナ〈幸運のイチゴ *Fragolette fortunate*〉(アディーナ)

N.3 合唱〈愛らしいアディーナ *Vezzosa Adina*〉(合唱)

— 合唱の後のレチタティーヴォ〈周りを見てごらん *Quanto d'intorno vedi*〉(アディーナ、セリーモ、ムスタファ、カリフ)

- N.4 アディーナとカリフの二重唱〈もしも私を嫌ってないなら、おお、わが愛しき人よ *Se non m'odii, o mio tesoro*〉(アディーナ、カリフ)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈ご主人様、どうしたのです *Che ti arresta o Signor?*〉(アリ、カリフ)
- N.5 カリフのアリア〈後宮の周囲を固めよ *D'intorno il Serraglio*〉(カリフ)
- N.6 シェーナ〈夜になった *S'alza la notte*〉とセリーモのアリア〈正義の神よ、私の抱く疑いを *Giusto ciel, che i dubbi miei*〉(セリーモ)
- シェーナとアリアの後のレチタティーヴォ〈ああ！ ああ！ どうしたんだ？ *Ahi! ah! Che avvenne?*〉(セリーモ、ムスタファ)
- N.7 四重唱〈愛しい住処を離れ *Nel lasciarti, o caro albergo*〉(アディーナ、セリーモ、ムスタファ、カリフ)
- 四重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ！ 恩知らずなアディーナ *Oh! sconoscente Adina*〉(アリ)
- N.8 アリのアリア〈まったく女というものは *Pur troppo la donna*〉(アリ)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈余の前からの *Si, dalla mia presenza*〉(アディーナ、カリフ)
- N.9 アディーナのアリアとフィナーレ〈その麗しき目を開き *Apri i begli occhi al di*〉(アディーナ、セリーモ、カリフ、合唱)

#### 物語 (時の指定なし。場所はバグダッドのカリフの後宮)

後宮の庭。合唱(役どころの指定なし)がカリフとアディーナの婚礼を祝う。後宮で育ったアディーナを愛するセリーモは、彼女をカリフから取り戻すためにムスタファを買収し、庭師として後宮に入る手はずを整える。だが、再び祝いの合唱が歌われ、カリフがアディーナとの結婚を宣言するので、セリーモは彼女が自分を裏切ったと思い、愕然とする(N.1 導入曲)。カリフがアリに、「アディーナを恋するようになったのは、彼女が昔愛した女奴隷ゾーラに似ているから」と話していると、当人が現れるので慌ててその場を去る。

アディーナが幸運のイチゴに託し、揺れ動く乙女心を歌う(N.2 アディーナのカヴァティーナ)。トランペットの音に導かれ、合唱がアディーナを称える(N.3 合唱)。ムスタファはアディーナにセリーモが来ていると教え、現れたセリーモは、「今夜後宮の外に迎えるの舟を用意するので、それに乗って逃げなさい」と告げて去る。恋人が死んだと思っていたアディーナは、二人の男への愛に逡巡し、結婚式の日延期をカリフに願ひ出る。理由を尋ねても答えを得られず、カリフは当惑する(N.4 アディーナとカリフの二重唱)。アリが来て、カリフの様子に驚く。結婚式延期の話を知ったアリは、先ほどアディーナが召使と二人で話し込んでいたので怪しい、と吹き込む。それを聞いたカリフは、後宮の周囲の警護を命じ、アディーナへの不信をつのらせる(N.5 カリフのアリア)。

夜。川の支流に臨む後宮の近く。独り佇むセリーモが、アディーナへの思いと不安で揺れている(N.6 シェーナとセリーモのアリア)。ムスタファが逃亡の手助けに現れる。足音がして身を隠すと、後宮からアディーナが忍び足で出てくる。再会したセリーモとアディーナは愛を確かめ合うが、大勢の兵士に包囲され、3人は死を覚悟する。現れたカリフはアディーナの不実をなじり、彼女がセリーモの命乞いをすると怒りを爆発させ、セリーモとムスタファに斬首刑を宣告する。嘆きと怒りのうちに全員立ち去る(N.7 四重唱)。アリはアディーナの行状に呆れ、女の性を風刺する(N.8 アリのアリア)。

アディーナは再びカリフに赦しを請い、拒絶されたショックで失神する。驚いて駆け寄ったカリフは、彼女の身に付けている自分の肖像画を見つける。それが以前ゾーラへ贈った品であることから、カリフはアディーナが自分の娘と悟り、セリーモの命を助けに行く。やがて合唱の呼び掛けで目を覚ましたアディーナがセリーモの身を案じると、背後から彼に呼びとめられ、無事を喜ぶ。カリフから娘であることを告げられたアディーナは感謝を捧げ、皆の祝福を受ける(N.9 アディーナのアリアとフィナーレ)。

#### 解説

##### 【作品の成立】

25 作目の《アディーナ》は、ロッシェニがイタリア以外の劇場のために作曲した最初のオペラである。非公式な形で作品依頼は、リスボンのサン・カルロス劇場のコントラバス奏者ガエターノ・ペッツァーナ(Gaetano Pezzana, ?-?) がロッシェニに宛てた書簡でなされた(1817年12月21日付)<sup>2</sup>。ペッツァーナはロッシェニと面識があったらしく、真の依頼者から最初の打診を委ねられたらしい。この依頼状は誤ってミラーノに送られ、12月27日の《ブルゴーニュのアデライーデ》初演のためローマ滞在中のロッシェニが転送された書簡を手にしたのは、ナポリに戻った後の1818年1月と思われる。

その後の交渉は、ナポリ在住の銀行家でリスボンと繋がりのあるエマヌエッレ・ニェッコ(Emanuelle [またはエマヌエーレ Emanuele<sup>3</sup>] Gnecco, ?-?) 伯爵との間で進められ、両者による正式契約書(1818年4月7日付)では《アディーナ》と題された「ファルサ・セミセーリアまたはメロドラマ」の台本に4月10日から2ヶ月間のうちに作

曲すること、報酬 200 ミラーノ・ツェッキエニ (540 ナポリ・ドゥカーティ) は 3 回の均等分割払いとし、台本が届いて作曲を開始したら三分の一、コンチェルタートの楽曲に着手したら三分の一、全曲を完成したら残り三分の一を支払うと明記されている<sup>4</sup>。ニュッコとロッシエニの間で交わされたこの契約書と前記依頼状が《アディーナ》に関する現存ドキュメントのすべてであり、以後、初演に至るまでの経過を知る手がかりは残されていない。

全集版の校訂者デッラ・セータはペッツァーナとニュッコが仲介者にすぎぬと考え、作品の真の依頼者を特定すべく調査を進め、リスボンのキンテラ男爵ホアキン・ペドロ (Joaquim Pedro barone di Quintela, 1801-1869) の可能性が高いと結論するに至ったが、決定的な証拠が存在しないため現時点では推論の域を出ないとしている<sup>5</sup>。

台本作者ゲラルド・ベヴィラクワ・アルドブランディーニ (Gherardo Bevilacqua Aldobrandini, 1791-1845) の本業は画家・舞台美術家であるが、1819 年にはトットラの協力者も務めていることからアマチュア台本作家とも位置付けられる。従来文献は《アディーナ》の原作をボイエルデュー作曲《バグダッドのカリフ (Le Calif de Bagdad)》(1800 年パリ初演) や、マヌエル・ガルシア作曲《バグダッドのカリフ (Il Califfo di Bagdad)》(1813 年ナポリ初演) に求めたが、デッラ・セータはこれを否定した。また現代の複数のロッシエニ研究者は、アルドブランディーニがフェリーチェ・ロマーニの台本《カリフと女奴隷 (Il califo e la schiava)》(フランチェスコ・バジエリ [Francesco Basili, 1767-1850] の作曲で 1819 年 8 月 21 日にミラーノのスカラ座初演) を改作したものと推測している。しかし、ロマーニ台本によるオペラの初演が《アディーナ》の契約から 1 年 4 ヶ月後であること、それに先立ってなぜロマーニ台本が第三者の手に渡ったかを合理的に説明できないため、デッラ・セータは断定を避けている。それでもこの二つの台本に関連があることは、テキストの比較で明らかにされた<sup>6</sup>。

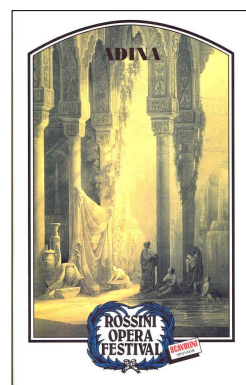
ロッシエニは 1818 年 4 月 7 日付の手紙で母に「リスボンのためのオペラを作曲するために約 3 ヶ月ボローニャに滞在します」と予告し<sup>7</sup>、事実 4 月 12 日と 16 日の間にナポリを発って 8 月末までボローニャに滞在し、後述するように自筆楽譜には父ジュゼッペの筆跡もあるので、4 月半ば以降にボローニャで作曲を始めて契約どおり 6 月初めには完成したものであると思われる。リスボンには自筆楽譜ではなく総譜の写しがニュッコ経由、もしくはロッシエニの手で直接送られたものと考えられる。だが、楽譜を入手した真の依頼者は上演を見送ってしまった。その理由は定かでないが、序曲のない不完全な作品としてお蔵入りになった可能性は高い。結果的に初演は 8 年後の 1826 年 6 月 12 日にサン・カルロス劇場で行なわれたが、当時のリスボンの新聞が上演批評を載せていないため評価のほどは知りえない (初演日の特定は、当時の新聞の記述でなされた)<sup>8</sup>。しかし、その後同地で再演されていないことから失敗と見て良いだろう。リスボンでは 1815 年の《アルジェのイタリア女》と《タンクレーディ》を皮きりにロッシエニ作品の上演が開始され、1820 年代には数多くの作品が人気を博していたので、本作の出来の悪さが際立ってしまったのかもしれない。

### 【特色】

作品成立の経緯からも判るように、《アディーナ》はロッシエニのオペラの中でも異例の作られ方がされている。そもそも彼は若き日にヴェネツィアで発表した五つのファルサを最後にこのジャンルから手を引いており、注文がなければファルサの作曲はあり得なかった (本作は劇の内容からオペラ・セミセーリアにも区分可能である)。また、初演都市の風俗や劇場、初演する歌手に関する知識がないままオペラを書くのもロッシエニにとって最初で最後であり、このことは《アディーナ》の音楽的性格だけでなく完成度にも大きな影響を及ぼしている。本作が彼の全 39 のオペラで最も靈感を欠くことは明白な事実であり、ひと言でいえば凡作である。

導入曲〈晴れやかに光り輝き〉(N.1) は冒頭合唱から常套的で、全体に旧作のモチーフと手法の使い回しが感じられる。序曲の欠如も当時のオペラ・ブッフアやファルサの常識から言えば、問題にされても仕方がない (ロッシエニは旧作の序曲を演奏すればいいと考えたようだが、楽曲を指定して写譜を送ることはしなかった)。アディーナのカヴァティエーナ〈幸運のイチゴ〉(N.2) も旧作の音楽素材の寄せ集めといった感じで新鮮味を欠き、後半部のアジリタのパッセージも定型的に過ぎる。こうした評価は、多かれ少なかれすべてのナンバーに共通する。

実は自筆楽譜にはロッシエニ以外に 4 人の筆跡が見られ、その一人は驚くべきことにロッシエニの父ジュゼッペである。九つあるナンバーのうちロッシエニの完全な書き下ろしは N.1、N.7、N.9 の 3 曲のみで、前記アディーナのカヴァティエーナ (N.2) は最初の 18 小節のみ真筆で書かれ、残りは不詳の協力者が完成させている (音楽内容について何らかの指示をした可能性があり、出来はそれなりに良い)。旧作からの転用も 3 曲あり、いずれも《シジスモンド》(1814 年) の第 2 幕からそのまま写譜されており、N.3 合唱〈愛らしいアディーナ〉の原曲は《シジスモンド》の合唱曲〈アルディミーラ万歳 (Viva Aldimira)〉、N.6 シューナ〈夜になった〉とセリーモのアリア〈正義の神よ、私の抱く疑いを〉はラディスラオのシューナ〈みじめな私! (Misero me!)〉とアリア〈正義の神よ、あなたは私の苦悩をご存知です (Giusto ciel, che i mali miei)〉、アリのアリア〈まっ



1999 年 ROF 上演  
プログラム表紙

たく女というものは) (N.8) はアナジルダの Rond (幸せを夢見ていました (*Sognava contenti*)) から採られている。ここでの転用は単なる移し替えにすぎないので、《アディーナ》の音楽として論評するわけにはいかない(《シジスモンド》の自筆楽譜から父ジュゼッペと二人の筆写者が写して歌詞を書き込んだだけで、ロッシーニの直接的な関与は無い)。

残るアディーナとカリフの二重唱(もしも私を嫌ってないなら、おお、わが愛しき人よ) (N.4) とカリフのアリア(後宮の周囲を固めよ) (N.5) は同一の不詳の協力者による作曲で、当該人物は前記 N.2 の補筆完成者でもある。こうした作られ方から言えば本作品はロッシーニが最も手を抜いて作ったオペラであり、書下ろしの 3 曲—前記の導入曲 (N.1)、四重唱(愛しい住処を離れ) (N.7)、アディーナのアリアとフィナーレ(その麗しき目を開き) (N.9) も精彩を欠き、スタイルが旧弊である。当然のことながら声楽的にも面白味が乏しい。ヒロインのアディーナの音域は  $b\flat-b^{\flat}$  で、最高音への立ち上げ方は常にヴォラティーナを使って導くひとつのパターンしか適用されていない。アジリタも典型的であることから、ロッシーニが凡庸なソプラノ歌手を想定したのは明らかである。実はペッツァーナの最初の依頼状では、予定される主役歌手(不詳)は「ソプラノの声域はすべて歌えるが、彼女に好ましい音域は [ソプラノ記号の] 第一線ド (c) から五線の上のファ (f<sup>♯</sup>) です」と釘を指していたのである。そのためロッシーニはアディーナの基本旋律の上限を  $g^{\flat}$  とし、 $b^{\flat}$  のアクトへの立ち上げもヴォラティーナの適用で容易にして華麗な歌唱をフィナーレに集中させ、そこで彼女の限界と思われる長く引き伸ばす  $a^{\flat}$  と、アクト  $b^{\flat}$  を使っている。

要するにこのオペラは、初演歌手の能力や個性、声楽的長所を一切知らずに中庸の歌い手を想定したがために、《セビーリヤの理髪師》の対極に位置する凡庸な喜歌劇となってしまったのである。転用楽曲が 1814 年の《シジスモンド》から採られていることでも、音楽的に後退した印象を拭えない。この作品がロッシーニのファルサで唯一合唱を持つのも、あらかじめ「合唱付き」と依頼状で求められたためである。レチタティーヴォ・セッコの作曲もすべて複数の協力者に委ねられ、その出来はお世辞にも良いとは言えない。

ロッシーニはリスボンを辺境の地とでも蔑視したかのように、安易な方法で《アディーナ》を完成させた。しかし、作品の依頼者がそれを感じ取れぬはずはない。初演が見送られた理由も、そこにあるのではなからうか。

### 【上演史】

前記のように、初演は作曲から 8 年後の 1826 年 6 月 12 日にリスボンのサン・カルロス劇場で行なわれたが、同地では再演されずに終わった。19 世紀中の再演は 1828 年 2 月 14 日ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ、サン・ペドロ劇場が唯一である(《グラナダ大公 (*O Grão Duque Granada*)》と題して上演)。ちなみにサン・ペドロ劇場は 1813 年 10 月 12 日に開場して 1824 年 3 月 25 日に火災で閉鎖、1826 年 7 月 22 日にロッシーニの《タンクレーディ》で再開場したばかりであった<sup>9</sup>。ブラジルは 1822 年にポルトガルから独立していたが、当時まだ旧宗主国の影響が強かったため、上演作品の候補として楽譜がポルトガルから送られたのであろう。

20 世紀の復活上演は、リオ・デ・ジャネイロ再演から 135 年後の 1963 年 9 月にシエナのキジアーナ音楽祭で行なわれた(リンノヴァーティ劇場。上演用の楽譜は作曲家ヴィート・フラッツィ [Vito Frazzi, 1888-1975] が作成)。同年ペーザロでも同じ上演グループが公演を行ない、5 年後の 1968 年にはオックスフォードでイギリス初演も行われた。その後 1970 年代にエヴァ・リッチョーリ・オレッキア (Eva Riccioli Orecchia) がオトス社 (Edizioni Musicali Otos) の委託でレンタル総譜と出版用のヴォーカルスコアを作成 (1969 年刊)、そのエディションを用いて 1981 年にポーロニャ、1991 年 9 月 28 日にローマの RAI アウディトリウム (演奏会形式)、翌 1992 年 5 月 8~10 日に同地のヴァッレ劇場で上演され、また同月 16 日にはリュウゲンのロッシーニ音楽祭 (Rossini Opernfestival Rügen) にてドイツ語訳の初演も行われた。ロッシーニ財団の批判校訂版による最初の上演は 1999 年 8 月 7 日、ロッシーニ・オペラ・フェスティバルで行われた (アウディトリウム・ペドロッチェ。指揮: イヴ・アベル、アディーナ: アレクサンドリーナ・ペンダチャンスカ)。

### 推薦ディスク

推薦に値するはまだ無い。既発売はオトス版を用いたアルド・タルケッティ指揮 (Ruggenti RUS551001.2 [2CD]) とヴィルヘルム・ケイテル指揮 (Artenova 74321 67517 2 [2CD])、ドイツ語版による演奏 (Canterino CNT1082[1CD]) のみ。

<sup>1</sup> 題名を《アディーナ、またはバグダッドの太守 (*Adina, ossia Il califfo di Bagdad*)》とするのは誤り

<sup>2</sup> 書簡全文は Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol. I, 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro, 1992, pp. 234-235. [書簡 111]

<sup>3</sup> 契約書の署名と全集版は Emanuele (エマヌエーレ)、*Lettere e Documenti* は Emanuele (エマヌエーレ) と表記。

<sup>4</sup> リスボンから支払われるのではなく、オペラを委嘱した人物の代理人でナポリ在住のニェッコが作曲の進行状況に照らして支払うとの意味に解釈できる。本契約書の全文は *Lettere e Documenti*, vol. I, pp. 274-6. 及び全集版序文 pp. XXII-XXIII. 参照。

<sup>5</sup> 少なくとも《アディーナ》の委嘱をリスボン市とする従来の文献は誤り (公的な委嘱や介在を示す資料は一切存在しない)。

<sup>6</sup> これに関する議論とテキスト比較については全集版《アディーナ》序文 pp. XXVII-XXXI を参照されたい。

---

<sup>7</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.206-207. [書簡 IIIa.112]

<sup>8</sup> 全集版《アディーナ》序文 pp.XXXVI-XXXVIII.

<sup>9</sup> Ibid., p.XXXVIII. 及び同 n.86.